坪田 智夫 監督 プロフィール

兵庫県出身。2000年法政大学社会学部卒業。箱根駅伝2区区間賞（4年次）、アジア競技大会・世界陸上日本代表、日本選手権1万m優勝など輝かしい成績を残す。2012年陸上部長距離コーチ、2013年4月 駅伝監督就任。

出場できない箱根駅伝を力に変えるために

「関東学生連合に出場する選手とそのサポート担当以外の部員は、補助員として沿道に立ちます。私も2年次に予選会を敗退し補助員を務めましたが、背中越しに同学年の選手が走り抜けていくのを感じ、言い難いほどの悔しい経験をした事が陸上人生のターニングポイントになりました」

「来年の箱根駅伝に、法政の名はありません。プログラムやポスターに、今回はチーム名が載らない悔しさ、そして補助員として感じたことや予選会の結果を忘れずに駅伝と向き合う事で、取り組み方が必ず変わるはずです」

「出場できないチームが補助員として大会をサポートし、100回以上の歴史があるのが箱根駅伝です。それを考えると、全員がしっかり役割を全うする時間にもして欲しいと願っています」

「再来年は補助員ではなく、沿道を走るという強い気持ちで取り組んで欲しいと思います」

「悔しさをバネに、箱根を目指す」

～ 誰かではなく自分がチームを引っ張る組織を目指す ～

第102回箱根駅伝予選会。法政は17秒差で11位となり、11年ぶりに本大会出場は叶わなかった。予選会終了から間もない時期ではあったが、坪田監督にその胸の内、来季への決意を伺った。

まずは予選会史上、最速タイムで通過できなかったレースを振り返っていただいた。「当日の気温は余り上がらないだろうと考え、想定より少し早いタイムで行こうと話して選手を送り出しました」「選手は、ほぼ設定通りに走ってくれたので、まさか予選落ちするとは思ってもいませんでした」「ただ、1人あたり1.7秒差だった事を考えると、予選会を知らない怖さや、“全てを出し切る”といった点が足りなかったのかなと思います」「昨年は東農大さんが1秒差で負けており、“1 秒でも負けは負け。時間的なものをしっかり考えていこう”と話していたのですが、私自身にも“出るのが当たり前”といった考えの甘さがあったのかもしれません」

直前にインフルエンザの選手が出ました。「数名が体調万全ではなかったので、無理や冒険はできず、守りのレースしかできませんでした」「“練習通りの力を発揮すれば絶対に落ちない”という練習をやってきたつもりですが、インフルの早期流行など、私の想定不足もありました」と語る監督の表情には、無念さが感じられた。

予選会直後の選手の様子は？「気持ちの整理がつかない選手はいたと思います。ただ、もう次の予選会へ向けて刻一刻と時間は進んでいきますので、下を向いていても仕方ありません。選手達の心理面は私も経験上分かります。非常に難しい部分はあると思いますが、だからと言ってのんびりする時間は我々にはありません」応援する我々も、気持ちを入れ替える必要を感じた瞬間だった。

これが法政の駅伝チーム

「法政はスペシャルな選手が毎年入ってくる訳ではなく、努力を重ねた選手が成長していくチームです」「努力を続けた選手は見た目で分かります。走る練習に加えウエイトも行い、食事・栄養補給・体のケア・睡眠にも気を配っていると、身体に表れます」「気持ちにスイッチが入った選手も、ガラッと身体が変わってきます」

「この10年、多くのご支援をいただき、チームを取り巻く環境はいい方向に変わりました。この現状を当たり前として捉えるのではなく、ご厚意の上に今があるという事を、選手には忘れずにいて欲しいと思っています」

私の思い

「箱根駅伝は10名しか走れませんが、他の部員のサポートがなければ成り立ちません。“チームのために”という思いがあれば、それぞれの場所で輝いていると思いますし、そのことは卒業後も社会で活躍出来る基盤になると思います」

「箱根駅伝出場という目標に向かって、個人としての取り組み方や計画性の重要さを知ることは勿論、組織の一員としてどういう立ち居振る舞いができるのかなど、この箱根駅伝という舞台でぜひ学んで欲しいと思います。そして、学ぶべき要素として、“組織力で勝つ”というのは絶対にあると、言い続けています」

坪田監督を応援しよう

来春の第102回箱根駅伝、坪田監督は関東学生連合の監督として、運営管理車から選手達を鼓舞することになる。法政からは大島選手が走る予定（区間エントリー発表は12/29）。

法政大学が箱根駅伝出場の常連校である矜持を示すためにも、これまでと同様、大島選手や学生連合の選手たち、そして坪田監督に声援をお願いします。

自らを見つめ直し、主体的に取り組む将来像

来季に向けての取り組みについて伺った。「予選会から時間が経っていないのでまだ具体化していませんが、変えていかなければいけない部分はありますし、少し時間をかけて考えたいと思います。選手へのアプローチの仕方も、考えなければと思っています」

「チームの良い部分は数多くあるので、良し悪しをきちんと見極め、練習も一から見直すつもりで取り組んでいきます」「見方を変えれば、今はチャンスだと思います。能力のある学生達ですし、最良のコンディションではないチーム状況でも早い走りが出来たことを見ても、十分に逆転はできるはず、という思いはあります」

「4年生が、エースが、誰かが、チームを引っ張るという事ではなく、今の1･2･3年生自身が、自らチームを変えるためにはどうしたら良いか。“自分が変わってチームを変えていくことを考えて欲しい”と予選会終了後、最初の練習前ミーティングで話しました」

大学卒業後、1万mなどの長距離トラック競技でも活躍された坪田監督。「5000や10000の種目で活躍する選手は、ある程度の能力や才能がないと、正直、世界と戦うのは厳しいと感じます」 ただ、箱根駅伝は違うという。「全員が箱根駅伝を目指して入部してきますが、決して能力の高い選手が出られる訳ではありません。取組み方次第で誰にでも走れる可能性があります」「箱根への道のりは人によって異なり、1年から出られる選手もいれば、4年間の長いスパンをかける選手もいます。怪我で苦労して3年目、4年目で花開くこともあります。距離が長くなれば成る程、こつこつやった選手が力を発揮します」

「練習の予定は私が作成し前日には告知しますが、それを見て何となくやる選手と、しっかりとした目的・意図を持ってやる選手とでは年間を通すと、とても大きな差になります」「ただ走れば良いのではなく、自分の中で確固たるものを持って練習すれば必ず身に付くし、失敗したら「何故なのか」の答え合わせをすれば進歩します」「箱根に向け、どうスタートラインに立ち、どう活躍するのか。そのための計画を立て、食事面・生活面を見直し、日々考え実行することが大切です」 そして「陸上競技はやってきた事がそのままタイムに出ます」と坪田監督。4年間の学生生活、極端に言えば24時間365日の全てを陸上に捧げている選手達の覚悟、そして凄さを、感じずにはいられなかった。

最後に、監督からメッセージをいただいた。「予選会では本当に多くの方々に応援していただきましたが、不甲斐ない結果になってしまいました。今後、様々な事を見直しながら、更に強いチームを作っていきたいと思っています。引き続き温かい眼差し、熱い応援をいただければと思います。再来年は必ず箱根駅伝に戻ってきます！」

箱根駅伝への出場は、応援団も待ち望んでいる